



和歌七部之抄

緒言百首

特別
イ 4
3163
88(8)



結題百首

またかきま
下つてむれ
水まこふれ
のまろし
いせ 後版

此題ハ号難
イテ今ハ
イハクハ
イハクハ
イハクハ

轉錄といふの
まじりし
まじりし
まじりし

まじりし
まじりし
まじりし

閑路早春

閑路早春
閑路早春
閑路早春
閑路早春

閑路早春
閑路早春
閑路早春
閑路早春

了そとに於て身とるに侍るけりて侍る也連
 懐れ歌あり固掛中言云勅勅此時の百首
 とま尻不信月也別 連懐の心よりけり
 思へ侍るにけり百首文歷元年お家以侍る
 百代よよけり人と世のしと思ふ女く無
 曲としひけり侍るに有河定家知所侍
 勅勅の身とるに侍る又子に宮侍る也
 の世に侍るに侍るに侍るに侍るに侍る
 四名も侍るに侍るに侍るに侍るに侍る

初上朝歌

名おのり
 侍るに侍る
 侍るに侍る
 侍るに侍る

初朝歌のあり侍るに侍るに侍るに侍るに侍る
 侍るに侍るに侍るに侍るに侍るに侍る
 侍るに侍るに侍るに侍るに侍るに侍る
 侍るに侍るに侍るに侍るに侍るに侍る
 侍るに侍るに侍るに侍るに侍るに侍る
 侍るに侍るに侍るに侍るに侍るに侍る
 侍るに侍るに侍るに侍るに侍るに侍る
 侍るに侍るに侍るに侍るに侍るに侍る
 侍るに侍るに侍るに侍るに侍るに侍る
 侍るに侍るに侍るに侍るに侍るに侍る

藤満遠樹

と侍るに侍るに侍るに侍るに侍るに侍る

とすのきしむり道あり向白とあり

津家行書

心願の国をよそめよれらる行なふら

○毎花思ふよそめいしむらむのむくく

印もよそめえらるる我所らるら

町をくくくくくくくくくくくく

ゆき

田家文書

中山田家文書ありせはいけり

山田

山田家の書ありてとゆへ

秋と海あり神くみえ初長れ

前たりんる書可有と書

野外談書

○書白野の所あり書れ清そ

書白野の所あり書れ清そ

書白野の所あり書れ清そ

書白野の所あり書れ清そ

書白野の所あり書れ清そ

書白野の所あり書れ清そ

暮業はじつにこれよりしてつらけりし情を
一神ありて人けり此の海官の初めおれり
乞座の乞ひてくそく余情やいよれり
あや

山路梅花

色し香もあつてそと細梅たひよまきの明ほの
○梅花白雲入はくぬ山屋も細いとあつて
有けりれ歌とさけりゆはくぬ山屋といふ
くもつらとゆ歌いひくると後るといふ歌
色し香もあつてそと細梅たひよまきの明ほの歌

を遊あそぶ一れんのみと色もも香もも知人を知る
いけ歌とよまつる也志願人を知るはゆして
ふんちとよまていふぬあつてあつていふ
一ちあつて遊るあつてあつてあつてあつて
れあふ候へ

梅薰杖枕

白ひあつて梅よさびさ梅もあつてあつてあつてあつて
早梅とよまつる也志願人を知るはゆして
くくつあつてあつてあつてあつてあつてあつて
くくつあつてあつてあつてあつてあつてあつて
くくつあつてあつてあつてあつてあつてあつて
くくつあつてあつてあつてあつてあつてあつて

早ふしのあけらふららららるるもやる時と見せり
りく時ふををいぬん之高云園天けぬよ極乃句い
まふらいされく園てり早と葦は似らむらり
るくさあさる

水邊古柳

年月と柳りさるる柳をさる河の末はらよの去
修物語り水は河のくもそるれりといひ侍を
とくく流る今案比は八松之後感の八松
よふらりぬまどくくさるくくもそるは向し玉
柳はけちとてゆりよは川のくもや古柳と

年月と柳りさるる柳をさる河の末はらよの去
修物語り水は河のくもそるれりといひ侍を
とくく流る今案比は八松之後感の八松
よふらりぬまどくくさるくくもそるは向し玉
柳はけちとてゆりよは川のくもや古柳と

雨中待花

年月と柳りさるる柳をさる河の末はらよの去
修物語り水は河のくもそるれりといひ侍を
とくく流る今案比は八松之後感の八松
よふらりぬまどくくさるくくもそるは向し玉
柳はけちとてゆりよは川のくもや古柳と

公や又親れいもこゝろうけは海に物なすし時の
あそわり守風あそびとくうり漢かあそび進たああそびや
寧ろあそび晝寢とくふああそびく妙飲とく滂あそびく去
れ海あそび神あそびの元あそびの事あそびやあそび廿打あそび旅あそびらあそびはあそびいあそびきあそびえ
とあそびうあそびりあそびをあそび事あそびのあそび目あそびもあそびらあそびりあそび花あそびもあそび咲あそびんあそびとあそび傳あそびるあそびら
んあそびふあそびくあそびらあそびふあそびんあそびゝあそびああそびんあそび〇あそび空あそび方あそび山あそびよあそびこあそびれあそびまあそびま
ぬあそびゆあそびりあそびぬあそびまあそびらあそびくあそびをあそび落あそびるあそびとあそびやあそび花あそびのあそびああそびれあそびまあそびん

野花笛人

玉あそびらあそびるあそび海あそびをあそびことあそびれあそび咲あそび花あそびのあそびちあそびとあそびいあそびふあそび成あそびはあそび野あそび田あそび花あそび笛あそび人
素あそび性あそびはあそび情あそびのあそび〇あそびいあそびはあそびまあそびせあそびうあそび花あそび笛あそびよあそびんあそびれあそびちあそびくあそび笛あそび人

又あそび花あそびのあそび〇あそびこあそびりあそびああそびるあそび無あそびんあそびよあそびゆあそびくあそびせあそびんあそびらあそび〜あそびせあそび花
法あそびよあそびかあそびくあそびまあそびんあそびすあそびのあそびんあそび〜あそび素あそび性あそびにあそび一あそび身あそび乃あそび上あそびとあそび云
誰あそびとあそび百あそび人あそびはあそび漢あそびなあそびれあそびらあそび趨あそび向あそび葵あそび門あそび乃あそび解あそびのあそび粉あそび
骨あそびああそびくあそび〜あそび此あそび趨あそびのあそびああそびもあそび侍あそびくあそび玉あそびこあそびらあそびりあそびとあそびい
命あそびれあそび〜あそび誰あそびんあそび之あそび花あそび乃あそび前あそび人あそび乃あそび命あそびれあそび極あそびとあそびか
〜あそび〇あそび心あそび起あそびるあそび事あそびのあそび数あそび更あそびとあそびとあそびれあそび人あそびもあそび又あそび命あそび乃あそびとあそびさ
〜あそび命あそび事あそび一あそび身あそび〜あそび花あそび乃あそび後あそび乃あそびとあそび也あそびと
命あそび人あそびのあそび心あそび〜あそび心あそびをあそびれあそび〜あそび命あそび乃あそびとあそび也あそびとあそび花あそび乃
乃あそび〜あそびとあそび命あそび乃あそび〜あそび心あそびあり

遠東山花

雑記

世を憂ふ
花もさうさう
くらんれんく二三
あつた
あつた

花もさうさう寸頃
くらんれんく二三
あつた
あつた

世を憂ふ
あつた
あつた

橋邊歎

あつた
あつた
あつた
あつた

船中言春

あつた
あつた
あつた

あつた
あつた
あつた
あつた

あつた
あつた
あつた

卯花隠路

あつた
あつた
あつた
あつた

一してたれ申す年 留ひ物くまらうけの詠
宮にけりるを我もる海とわれ物たよゆり其時の
海にゆりる病や花とよの河ゆり分り宮に
候まらり神妙成物ありたまふとつら歌あり
荒蕪見露杖菌泣涼詞同同老捨悲これ作
とあごと蘭れらみらる年一よ作らるれば此心
もや又為家の方よ。○知れたれもや人の身
た人言ゆり分り中節乃右道此歌よ是と
とまらるみ云戴安道月言よとまらるるまらる
院れり無代月の一 竟成ありのなまらる

何れ那迷言詔歌や

初回郭云

何れを鹿めらるる時鳥又打らぬこを此古也
さるるらうらうらのまに又五月待山時鳥打
羽ゆりさけあ首ありてあはるる去年
叶ゆあきしんらうらうらうらうらうらうら
あありらるる。○あはるるる年とまらるる
春自ら山よりわらわらうらうら

山家郭云

山家郭に待まらるる時鳥らるるあはるる

○風物にて是より別々なりてはあつて那西を
 へしと云と何と云はれん思ふ一人の神は香を
 携へてあつても身もなほあつてもあつても
 へしよりあつてもあつてもあつてもあつても
 神統

杜の月夜

清人れはあつてもあつてもあつてもあつても
清人れはあつてもあつてもあつてもあつても
 一人のあつてもあつてもあつてもあつても
一人のあつてもあつてもあつてもあつても
 くの秋とあつてもあつてもあつてもあつても
くの秋とあつてもあつてもあつてもあつても
 深きとあつてもあつてもあつてもあつても
深きとあつてもあつてもあつてもあつても

清人のあつてもあつてもあつてもあつても
 一人のあつてもあつてもあつてもあつても

野夕暮草

とやうと云と何と云はれん思ふ一人の神は香を
 携へてあつてもあつてもあつてもあつても
 へしよりあつてもあつてもあつてもあつても
 神統

洞夜堂火

日新ひにのあはれはとてとて敬うやまはせ若わかき斬きる光あきせり

鳥居
皇の御孫
の御孫
の御孫
の御孫

光あきせりはとて若わかきは去いるそとれははの心こころかき

若わかきは日ひ新にとて思おもはるまはは移うつるはまま堂どうを

若わかくはあはれ物ものされ日ひ新にとて思おもはるはとて思おもはる

唯ただ堂どうは

行路いぢの歌

夕ゆふ立た神かみももたれはるるままのの心こころのの心こころのの心こころ

夕立
の神
の神
の神

夕ゆふ立た神かみももたれはるるままのの心こころのの心こころのの心こころ

絶た無なの

初秋はつあきの風

初はつ秋あきのの風かぜのの風かぜのの風かぜ

初秋
の風
の風
の風

初はつ秋あきのの風かぜのの風かぜのの風かぜ

初はつ秋あきのの風かぜのの風かぜのの風かぜ

初はつ秋あきのの風かぜのの風かぜのの風かぜ

初はつ秋あきのの風かぜのの風かぜのの風かぜ

初はつ秋あきのの風かぜのの風かぜのの風かぜ

あけ道中^{（下）}を^{（上）}流^{（中）} 舟^{（舟）}の^{（舟）}中^{（舟）}一^{（舟）}く^{（舟）}る^{（舟）}其^{（舟）}の^{（舟）}風^{（舟）}と
あ^{（舟）}れ^{（舟）}物^{（舟）}人^{（舟）}其^{（舟）}く^{（舟）}と^{（舟）}部^{（舟）}一^{（舟）}行^{（舟）}く^{（舟）}は^{（舟）}な^{（舟）}き^{（舟）}ぬ

涸月七夕

天^{（舟）}河^{（舟）}を^{（舟）}つ^{（舟）}ら^{（舟）}ふ^{（舟）}の^{（舟）}の^{（舟）}こ^{（舟）}ろ^{（舟）}を^{（舟）}れ^{（舟）}て^{（舟）}の^{（舟）}あ^{（舟）}や^{（舟）}も^{（舟）}あ^{（舟）}ら^{（舟）}じ^{（舟）}
ま^{（舟）}の^{（舟）}こ^{（舟）}ろ^{（舟）}を^{（舟）}れ^{（舟）}て^{（舟）}道^{（舟）}中^{（舟）}の^{（舟）}あ^{（舟）}ら^{（舟）}じ^{（舟）}は^{（舟）}
あ^{（舟）}の^{（舟）}あ^{（舟）}ら^{（舟）}じ^{（舟）}は^{（舟）}こ^{（舟）}ろ^{（舟）}を^{（舟）}れ^{（舟）}て^{（舟）}道^{（舟）}中^{（舟）}の^{（舟）}あ^{（舟）}ら^{（舟）}じ^{（舟）}は^{（舟）}

野亭夕秋

野^{（舟）}亭^{（舟）}夕^{（舟）}秋^{（舟）}
あ^{（舟）}の^{（舟）}あ^{（舟）}ら^{（舟）}じ^{（舟）}は^{（舟）}こ^{（舟）}ろ^{（舟）}を^{（舟）}れ^{（舟）}て^{（舟）}道^{（舟）}中^{（舟）}の^{（舟）}あ^{（舟）}ら^{（舟）}じ^{（舟）}は^{（舟）}
あ^{（舟）}の^{（舟）}あ^{（舟）}ら^{（舟）}じ^{（舟）}は^{（舟）}こ^{（舟）}ろ^{（舟）}を^{（舟）}れ^{（舟）}て^{（舟）}道^{（舟）}中^{（舟）}の^{（舟）}あ^{（舟）}ら^{（舟）}じ^{（舟）}は^{（舟）}

あ^{（舟）}の^{（舟）}あ^{（舟）}ら^{（舟）}じ^{（舟）}は^{（舟）}こ^{（舟）}ろ^{（舟）}を^{（舟）}れ^{（舟）}て^{（舟）}道^{（舟）}中^{（舟）}の^{（舟）}あ^{（舟）}ら^{（舟）}じ^{（舟）}は^{（舟）}
あ^{（舟）}の^{（舟）}あ^{（舟）}ら^{（舟）}じ^{（舟）}は^{（舟）}こ^{（舟）}ろ^{（舟）}を^{（舟）}れ^{（舟）}て^{（舟）}道^{（舟）}中^{（舟）}の^{（舟）}あ^{（舟）}ら^{（舟）}じ^{（舟）}は^{（舟）}
あ^{（舟）}の^{（舟）}あ^{（舟）}ら^{（舟）}じ^{（舟）}は^{（舟）}こ^{（舟）}ろ^{（舟）}を^{（舟）}れ^{（舟）}て^{（舟）}道^{（舟）}中^{（舟）}の^{（舟）}あ^{（舟）}ら^{（舟）}じ^{（舟）}は^{（舟）}

い道曉秋

明^{（舟）}河^{（舟）}の^{（舟）}あ^{（舟）}ら^{（舟）}じ^{（舟）}は^{（舟）}こ^{（舟）}ろ^{（舟）}を^{（舟）}れ^{（舟）}て^{（舟）}道^{（舟）}中^{（舟）}の^{（舟）}あ^{（舟）}ら^{（舟）}じ^{（舟）}は^{（舟）}
あ^{（舟）}の^{（舟）}あ^{（舟）}ら^{（舟）}じ^{（舟）}は^{（舟）}こ^{（舟）}ろ^{（舟）}を^{（舟）}れ^{（舟）}て^{（舟）}道^{（舟）}中^{（舟）}の^{（舟）}あ^{（舟）}ら^{（舟）}じ^{（舟）}は^{（舟）}
あ^{（舟）}の^{（舟）}あ^{（舟）}ら^{（舟）}じ^{（舟）}は^{（舟）}こ^{（舟）}ろ^{（舟）}を^{（舟）}れ^{（舟）}て^{（舟）}道^{（舟）}中^{（舟）}の^{（舟）}あ^{（舟）}ら^{（舟）}じ^{（舟）}は^{（舟）}

秋風のやまゆふのこころをいかに思ふか

余情を詠物と

海上待月

淡路島秋の夜をいかに思ふか

あきつら月ま
つきの月ま
あきつら月ま
あきつら月ま

いかに思ふか

と色くらき

こればかり

いかに思ふか

ともしよと

佳月よのち

いかに思ふか

成へ

月ま

く又あ

通ひ

松岡秋月

秋のやまゆふのこころをいかに思ふか

君長此酒竹の節一樽をれぬとわらふを思ふ
まに作ひのつゝまじり秋のまじり交はれぬ
をさしめも麻さうらうとていへ

田家持衣

春霜れおとすの首の風のこゝろをさかたに衣打
○朝衣れおとすの首の風のこゝろをさかたに衣打
ちりけふおはげしむとわらひく思侍る一
又時まじりて首の風を分風とてしつゝあつと
りしりて衣と打てとてあつと風とて
おとす秋の風はこゝろをさかたに衣打

古酒秋暮

夕暮よ〜〜の海ぬる川秋衣打のつゝあつと
作さまじり人部鳥れ秋とてしつゝ遠近とて
ち〜と音〜とてしつゝあつと風とて

秋風満野

夕暮よ〜〜の海ぬる川秋衣打のつゝあつと
まじり下露をぬるふとてしつゝあつと露とて
〜〜とてしつゝあつと風とてぬとてぬ
ち〜とてしつゝあつと風とてぬとてぬ

歌下同出

乳濁ら萩れまうらうら下家まみく色わる松生乃色
^{半三三三三}鷹れあふらやあちけけん物ありふ宿り萩生
 くのあむらうらとさうらうらくくとあふ家
 乃好定ふら海生の音し切あうらうら
 之葦乃るみらう海のわらうらうらと淡て有
 人竟孝法ありまらうらうら海色あふ生れ
 都け歌ゆらう約るくは色音ありうらうら
 白くや

紅葉深水

山の間をくくくく花葉のあふ水も色ゆきり
 白海河と花と思くと修徳の清らと道
 了の時をて眺らうらうら海の色音新新しうら
 け時をうらうらうらうらうらうらうらうら
 うら

半一紅葉

山々海河あふらの花葉のあふ水も色ゆきり
 白海河と花と思くと修徳の清らと道
 了の時をて眺らうらうら海の色音新新しうら
 け時をうらうらうらうらうらうらうらうら
 うら

露庭権花

秋風よよめぬ白雲と志ありてむらさきの花
よ葉よよめぬとありてうらやまありてひら
と花よよめぬとありてむらさきの花
てむらさきの花よよめぬとありてひら
れあよめぬとありてむらさきの花
ありてむらさきの花よよめぬとありてひら
れよよめぬとありてむらさきの花

河邊草花

又井河のほとけの流花の色と相らひまじつ白菊はむ
流とより分責しきりて前へゆくうひからるる

世とりの
うらやま

いつて波を常楽とて美しき花と推しあへ
清き水はあつたもまたあつたと衣あは
と流のまじりて流花を不愛せしむる花を
推しあへ

独惜言餘

秋の
うらやま
うらやま

人のとらぬとて秋の風を秋の別と
中しく人のとらぬとて秋の風を秋の別と
世とりの別ありて世とりの別あり

世とりの
うらやま

物とりの別ありて世とりの別あり

ころこ
よひ
くし
うめ
しん
ま
了る人よりを何れもて神宮月より人より
今日より申すに誠十月一日日比ありて
あきく調治ひよのけ好すいなるま

霜理唐葉

朝霧れ産の抱きおらき連くものうらむる言のふと
法花經如是報此ゆる人こぞは因果これ
道ぬみちとせりよとらうと

屋上園寂 尾より白くそう思ふ御

ゆられ金よと敷れきと流つ風のひ馬子麻くむと
誠け系は思もわらうと流くまを氣保きた

ゆら
ゆら
ゆら
流るる流るる流るる

古寺初言

ひりや何の飛の布きい流るる海へ入移る白言 今朝初言

龍門寺と流るる何の飛の布きい流るる海へ入移る白言
人如鳥海雲出地是龍門寺 今朝初言

水登草葉まらとわらうと流るる海へ入移る白言
と流るる海へ入移る白言

庭言狀人 庭言狀人 庭言狀人 庭言狀人

我者いふらん人 我者いふらん人 我者いふらん人 我者いふらん人

遍照教の道 遍照教の道 遍照教の道 遍照教の道

少くも 少くも 少くも 少くも

と と と と

よ よ よ よ

し し し し

は は は は

海邊本言

庭言狀人 庭言狀人 庭言狀人 庭言狀人

庭言狀人 庭言狀人 庭言狀人

庭言狀人 庭言狀人 庭言狀人

庭言狀人 庭言狀人 庭言狀人

とく とく とく とく

○ ○ ○ ○

り り り り

の の の の

重 重 重 重

ら ら ら ら

異 異 異 異

多し松籟一たふよ清くは家澄秋よ〇衣花
ち道々海とら思を〜つ〜美くはほる
浦

水師多声

其の美しむれと〜も其れ入る月の新〜
さあ〜と〜作〜と〜知〜と〜月〜の〜
うらむを身ゆ〜し新也る海〜の神々
ふゆ〜水〜の師れ字と前〜らあり

湖上衛

よの海月待〜れ〜長^{チレウ}結らるは海とらて時人

月もも〜と〜く〜を〜し〜家浦はよ
〜と〜い〜鳥〜の〜神^{チレウ}〜く〜の〜
〜と〜い〜何〜ふ〜ら〜作^{チレウ}〜海^{チレウ}〜奥^{チレウ}〜け〜ま〜ち〜と〜ん〜の
〜と〜い〜と〜付^{チレウ}〜里^{チレウ}〜と〜就^{チレウ}〜よ〜と〜井^{チレウ}〜寺^{チレウ}〜う〜ら〜と〜ん〜の
〜と〜い〜海^{チレウ}〜は^{チレウ}〜あ^{チレウ}〜ら^{チレウ}〜あ^{チレウ}〜け^{チレウ}〜江^{チレウ}〜中^{チレウ}〜ま^{チレウ}〜と〜ん〜の
〜と〜い〜と〜い〜る〜と〜海^{チレウ}〜の〜あ^{チレウ}〜と〜い〜と〜海^{チレウ}〜物
〜と〜い〜と〜い〜る〜と〜河^{チレウ}〜鳥^{チレウ}〜の〜水^{チレウ}〜れ^{チレウ}〜と〜い〜と〜く〜と
〜と〜い〜と〜い〜る〜と〜月^{チレウ}〜の〜と〜い〜と〜海^{チレウ}〜の〜邊^{チレウ}〜乃
〜と〜い〜と〜い〜る

月もも〜と〜く〜を〜し〜家浦はよ
〜と〜い〜鳥〜の〜神^{チレウ}〜く〜の〜
〜と〜い〜何〜ふ〜ら〜作^{チレウ}〜海^{チレウ}〜奥^{チレウ}〜け〜ま〜ち〜と〜ん〜の
〜と〜い〜と〜付^{チレウ}〜里^{チレウ}〜と〜就^{チレウ}〜よ〜と〜井^{チレウ}〜寺^{チレウ}〜う〜ら〜と〜ん〜の
〜と〜い〜海^{チレウ}〜は^{チレウ}〜あ^{チレウ}〜ら^{チレウ}〜あ^{チレウ}〜け^{チレウ}〜江^{チレウ}〜中^{チレウ}〜ま^{チレウ}〜と〜ん〜の
〜と〜い〜と〜い〜る〜と〜海^{チレウ}〜の〜あ^{チレウ}〜と〜い〜と〜海^{チレウ}〜物
〜と〜い〜と〜い〜る〜と〜河^{チレウ}〜鳥^{チレウ}〜の〜水^{チレウ}〜れ^{チレウ}〜と〜い〜と〜く〜と
〜と〜い〜と〜い〜る〜と〜月^{チレウ}〜の〜と〜い〜と〜海^{チレウ}〜の〜邊^{チレウ}〜乃
〜と〜い〜と〜い〜る

夜水鳥

ふいふみけおとすくくけあつたれぬを
 こそ馬のさくしよきりり言て龍田にや
 とうてわりぬまれ中よあわりと
 ぬちりよ女あきりーとらよ隔あ隔と
 こそ男れ物とーとらとせとまいつた
 〇〇あつたまきれしけ島らめ衣龍田
 うふよあつとく啼と獲たれくあき
 〇龍田いんげといて行水のゆあつた
 〇〇あつたあつたあつたあつたあつた
 〇〇あつたあつたあつたあつたあつた

横おしと侍くからくわした家のあつた
 とらんとらんあつたあつた

御膳所

今あつたあつたあつたあつたあつた
 横氏物法くあつたあつたあつたあつた
 〇〇あつたあつたあつたあつたあつた
 けさんとあやあつたあつたあつたあつた
 中りくくあつたあつたあつたあつたあつた
 左よあつたあつたあつたあつたあつた
 こそあつたあつたあつたあつたあつた

○今きとてとらん燈とじとほいも級ぬれ
とひれらとやゆらん柏木七返り書女とまゐりえ
ん燈れらとやゆらんと積くゆりやん
とまゐり書○まゐりひくゆりやん
事とつらひひくゆりやん
只秋しふとまゐりゆりやん
よゑれと

彼時賦意

夫と物とつらひひくゆりやん
百葉よ○是の心橋つらひひくゆりやん

君と物とつらひひくゆりやん
らん印の袂のくま
乃心侍もや今物却し
とあゝとつらひひくゆりやん
の厚れ共のつらひひくゆりやん
とつらひひくゆりやん

途中賦意

道の邊れ井のつらひひくゆりやん
とつらひひくゆりやん

人からうらうらと

海門

海門

海門の門はゆるゆると開かれ

ゆるゆると開かれ

ゆる

ゆる

ゆるゆると開かれ

ゆる

ゆるゆると開かれ

ゆるゆると開かれ

ゆる

ゆる

ゆるゆると開かれ

ゆる

ゆるゆると開かれ

ゆるゆると開かれ

ゆるゆると開かれ

ゆる

ゆるゆると開かれ

ゆる

ゆるゆると開かれ

ゆるゆると開かれ

ゆる

幅入名色

うらめれね名色をいふ人御身付たるは後ぬ御を
あまのり あまのり 承身れりて持州ちりうの名前へ海道やしらるまよ
りてあまのり あまのり 承身れりていひて海軍にあらうりて
はらうりて

まよ 海へ〇まよりて御身のこゝに罪白ていひて

よとを懸立され是と名前のいへて世代り終て
他國に申す御身あまのり

絶不名色

あまのり人のあまのりていひてあまのりてあまのりて
海内侍とて老人は海軍のいへていひてあまのり

あまのり あまのり 承身れりて後一白御くもてあまのり
と承身れりてあまのり承身れりてあまのり承身れりて
車より後内侍〇〇〇〇〇〇人のあまのり承身れり
神のあまのり承身れりてあまのり承身れりてあまのり
あまのり承身れりてあまのり承身れりてあまのり承身れり
一向に承身れりてあまのり承身れりてあまのり承身れり
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
あまのり承身れりてあまのり承身れりてあまのり承身れり
あまのり承身れりてあまのり承身れりてあまのり承身れり

承身れりてあまのり承身れりてあまのり承身れりてあまのり承身れり

あはれはるまのまゝに
あはれはるまのまゝに
あはれはるまのまゝに
あはれはるまのまゝに
あはれはるまのまゝに
あはれはるまのまゝに
あはれはるまのまゝに
あはれはるまのまゝに
あはれはるまのまゝに
あはれはるまのまゝに

曉更寢覺

あはれはるまのまゝに
あはれはるまのまゝに
あはれはるまのまゝに
あはれはるまのまゝに
あはれはるまのまゝに
あはれはるまのまゝに
あはれはるまのまゝに
あはれはるまのまゝに
あはれはるまのまゝに
あはれはるまのまゝに

薄言春風

あはれはるまのまゝに
あはれはるまのまゝに
あはれはるまのまゝに
あはれはるまのまゝに
あはれはるまのまゝに
あはれはるまのまゝに
あはれはるまのまゝに
あはれはるまのまゝに
あはれはるまのまゝに
あはれはるまのまゝに

雨中縁竹

あはれはるまのまゝに
あはれはるまのまゝに
あはれはるまのまゝに
あはれはるまのまゝに
あはれはるまのまゝに
あはれはるまのまゝに
あはれはるまのまゝに
あはれはるまのまゝに
あはれはるまのまゝに
あはれはるまのまゝに

河水流注

若水清純河の夕名乳一葉もろもろの
いりあもまふくはららるる蓮葉のららるる
若水あく一葉もろもろとままはははら
はくはらららら一葉もろもろのら
らあはらららら一葉もろもろのら
らららら

春秋野狂

あつ野の露の介乳ぬるけのりふまま
ららららららららららららららら
らららら

周遊行書

六朝
行人のうらやまらららららららららら
初若更畫二盞酒西出湯園無故人又
改周陽少三條曲折柳の秋と秋今葉
行年れ〇初周れ周吹のあらまひらら
らららららららららららららららら
ととととととととととととととととと
ととととととととととととととととと
ととととととととととととととととと

山家夕風

言つて家内をたゞのまじりて思ふくはしむるは家の神柱
神柱とは家の柱をいふ
 杖の節をまじりて思ふくはしむるは家の神柱
神柱とは家の柱をいふ
 神の神をまじりて思ふくはしむるは家の神柱
神柱とは家の柱をいふ
 の神をまじりて思ふくはしむるは家の神柱
神柱とは家の柱をいふ

山家入掃

古跡を母あつて人々もまじりて思ふくはしむるは家の神柱
神柱とは家の柱をいふ
 杖の節をまじりて思ふくはしむるは家の神柱
神柱とは家の柱をいふ
 神の神をまじりて思ふくはしむるは家の神柱
神柱とは家の柱をいふ
 の神をまじりて思ふくはしむるは家の神柱
神柱とは家の柱をいふ

海路略

古跡を母あつて人々もまじりて思ふくはしむるは家の神柱
神柱とは家の柱をいふ
 杖の節をまじりて思ふくはしむるは家の神柱
神柱とは家の柱をいふ
 神の神をまじりて思ふくはしむるは家の神柱
神柱とは家の柱をいふ
 の神をまじりて思ふくはしむるは家の神柱
神柱とは家の柱をいふ
 古跡を母あつて人々もまじりて思ふくはしむるは家の神柱
神柱とは家の柱をいふ
 杖の節をまじりて思ふくはしむるは家の神柱
神柱とは家の柱をいふ
 神の神をまじりて思ふくはしむるは家の神柱
神柱とは家の柱をいふ
 の神をまじりて思ふくはしむるは家の神柱
神柱とは家の柱をいふ

石百首宗願字紙一息与わく一因
書以自号下和字一牛又因桂之條面
殿竟宮之ふり子終一一分月村の字也
・牛島加州者之

山本書房白子宗長為我園去一決の以わく多れお逢
る事一一人の心は一人の心多しと云われ

東徳門

安元三年十二月任侍從十一年朝廷下付一
如之貞永元年^壬新勅撰^壬同二年如家^壬

此一冊小傳宗艷集而大成可
河勉美加一見之

鎌名野釋判

右ノ下卷鎌名院殿御自判
宗艷以自号下和字者也

文祿三年^甲卯月下旬寫之

兼應元

壬辰

仲冬吉日

